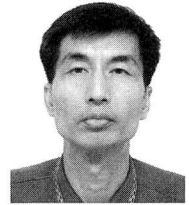


建皇子(651年-658年)についての覚え書

松延 秀一
京都大学



あらまし

天智天皇の第三子建皇子は「日本書紀」に「唾にして語ふこと能はず」と記された。その記述があるのはなぜか。本覚え書では、壬申の乱の原因との関係で考えてみた。天智の子にはほかに大友皇子もいたが、乱で敗死した。書紀においては、勝者の天武の立場を正当化するため、大友は後継者とはみなされなかったものであり、結局、天智の息子には正統な後継者はいなかったことを強調するため、建の記事も記載された、と推定した。

キーワード: 建皇子、天智天皇、天武天皇、壬申の乱、日本書紀

はじめに

1998年の日本歴史学会京都大会において、那須英彰氏は、天智天皇の第三子の建皇子が唾であったことを紹介された。もともと、紹介だけであって、なにゆえにそういう記事があるのかについては説明がなかったと思う。彼がその後何か文章で発表したのか、管見の限りでは見当たらない。そこで、京都大会での彼のレジュメ(「日本歴史学会個人研究論文集」2002年, p.16-17)を手がかりにして、なぜ記載されたのかについて探ってみよう。ただし、本稿は本格的な研究論文とは言えず、覚え書にとどまる。

史料等について

まず、史料の確認である。「日本書紀」(以下書紀)が唯一の史料であろう。原文は漢文であるが、読み下し文が岩波文庫で出版されている(5冊, 1994-1995)。文庫版は岩波の「日本古典文学大系」(1965-1967)の内容そのままである。その他、注釈書は多い。現代語訳は中央公論社から出ている(中公パックス, 日本の名著, 1983年。中公クラシックス, 2003年)。いずれも入手は容易であり、図書館でも閲覧できるだろう。

辞典については、まず吉川弘文館の「國史大辞典」15巻17冊(1977-1997)が挙げられる。ただし、建皇子単独では項目としては出てお

らず、天智天皇の項目の中に言及がある(第9巻, 1988年)。次の皇太子かと期待されていたらしいが、唾のことにについては書かれていない。同じく吉川弘文館の「日本古代人名辞典」では第4巻(1963年)に建王として項目に出ている。ここでは、書紀の天智紀によるとして、唾であったことが記されている。書紀に明記されていて辞典には一応紹介されており、7世紀後半の歴史叙述には斉明女帝の時代にエピソード的に出てくるが、これまでは後述の先行研究を除きだれも唾の記載を特別に何か意味あることとは取り上げていなかったことになる。当方にしても、那須氏が本学会で発表するまでは見過ごしていたようなものであり、彼には感謝しなければならない。

以上、原史料と辞典について述べた。ここから出発し、先行業績をさがしながら、考察することになる。那須氏は、吉野裕子氏の著書に触れているが、他にないだろうか。

その前に、書紀についてふれておこう。概略は各種の辞典類に譲るとして、これは一応歴史書の形になっているけれども、当時の古代天皇制国家権力による自己正当化の書、つまり国定の教科書みたいなものであり、皇国史観の源流になった。前半の神代史なるものは神話伝承の世界なので論外としても、後半についても、史実としての信憑性を常に吟味

しなければならない。本稿の範囲では、その編集が天武天皇系皇族(舎人親王)の責任でなされたことが注目される。なぜなら、天武は大海南時代に天智を補佐していたがやがて対立し、天智死後、壬申の乱(672年)で天智の子大友(648年-672年。明治になって弘文天皇の名称を贈られる)を武力で倒したのであり、後継をめぐる内乱の正当化のためにも歴史書の編纂を必要としたからである。もっとも天武存命中には完成せず、複雑な編纂過程を経て720年に完成した。とは言え、天智時代の記事については、天智・大友と対立した天武の立場からの解釈(自己正当化)が入っていることが予想される。また、壬申の乱により、大津京(667-672年)時代の記録が失われたことも考えられる。ただ、建については、生死の年が651-658年とされているので、何らかの記録は大津でなく飛鳥に残されていたであろうし、実在に疑問はないだろう(ただし母親については疑問が出ている)。

先行研究について

本稿の課題は、なぜ皇族に唾の皇子がいたことが記述されたのかを考えることである。

現在でもそうであろうが、身内に障害者がいるというのは、あまり公にはしたがらないであろう。むしろ、隠されることが多いのではあるまいか。ましてや、当時の支配階級たる皇族の一員に障害者がいたとなると、その事実は記載されないことが多かったであろう。建の唾の記載があるのはたまたまのことで稀有のことかも知れない。あるいは、天智・天武の母である斉明が皇孫である建の早すぎる死に対し、歌を6首残したからであろうか。おそらくこれがもっとも簡単な解答かも知れない。だがそれだけだろうか。

往々にして、古代史解釈にあたっては、国内には他にさしたる文献がないので、書紀の

設定した枠組に沿って考えてしまうことが多く、これにはいくら警戒してもしすぎることはないだろう。

この問題について、まず、上田正昭氏の見解を紹介しよう。「日本神話」(岩波新書 1970年)では、古事記に出てくる出雲の神の崇りと関連させて以下に述べている(p.183-184)。

齊明天皇五年の条には、出雲国造に「神の宮」を修葺せしめる記事がある。なぜ六五九年(齊明五)、にわかに出雲の祭祀が問題になったのか。

そこにはつぎのような事情が考えられる。中大兄皇子(天智天皇)の皇子建は、「日本書紀」がその本文系譜に「唾にして語ること能はず」と書くように、唾の皇子であった。その皇子がなくなったのは六五八年である。言霊信仰とコトシロヌシ、唾と出雲とのつながりを前提にしているなら、この皇子の死と出雲の祭祀は多分に関係があるだろう。

上田氏は「大王の世紀」(小学館 1973年)においてもこの年の出雲の神の宮の造営は前年における唾の皇子建の死と関係があると趣旨のことを述べている(p. 92)。ここでコトシロヌシ(辞代主)というのは、記紀神話の中では出雲系の神の一つとされ、国譲り神話の中で国譲りを承諾する役回りを演じさせられている。言わば、大和の支配を受ける側の神とされ、そして言霊信仰を代表していた。言葉にかかわる神である。とすれば、当方の見るところ、国譲りを余儀なくされ退場していった神が唾の皇子を出現させるという形で天皇家に崇ったということ、それを記述して、出雲の神の祭祀をもおろそかにしないように警告として残したということになるのだろうか(関連して、垂仁天皇の子も唾であったと言う伝承がある。伝承であって、実在は疑わしい

が)。

しかし、古事記に出てくる出雲の神の崇りの記事と書紀の記述とを関係づけるのは、記紀それぞれの編纂の構想が異なるので、妥当かどうかは疑問が残る。そして正史として扱われたのは書紀なのだから、書紀そのものに即して考えるべきだろう。

もう一つ、中西進氏の「天智伝」(中公叢書、1975年)がある。これは、天智の伝記であるが、何分にも文献の乏しい時期のことゆえ、書紀をなぞったような、そして中西氏の解釈も含む小説風伝記である。この中に建のことも出てくる(p. 129-135)。抜書きしてみよう。(カッコ内は松延。… は省略していることを示す)

… 建は、八歳のその日まで物を言わなかった。唾である。唾であることが一層聡明にしたのであろうし、素直さも増したのであろう。また、不具のゆえに周囲の者の不憫さをさそい、人人の寵愛は一入であった。

皇子は中大兄の第一の皇子であり、… 中大兄は … 男王が少ない。建を加えて四人にしか過ぎない。ところが建王は唾であった。…

古来唾の皇子は例がないわけではない(垂仁の子が出雲大神を祭って物を言うようになった事を紹介)。わが身は何物に崇られているのか(中大兄の心境を中西氏が解釈)。

… 遠智媛との結婚は呪われた事件を糊塗するための結婚であった。この歪められた結びつきが嫡出唯一の皇子を唾にしたのか。…

建は中大兄の嫡男であった。だから、順調なら後継者となりうるはずだった、ということである。何かの祟りだったというのは現代人から見ると非科学的ということになるが、何せ古代のことであるから、崇りを信じたとしても不思議ではない。この中西氏の解釈は

先の上田氏の解釈に基づいているのかも知れない。とは言え、唾の原因や八歳での死因について書紀は述べていない。これについては、吉野氏や那須氏が推定しているように、何らかの精神的ストレスによると考えてよいだろう。聴覚障害による唾かどうか。

本稿での考察

それでは、何ゆえに唾の皇子の存在が記載されたのか。書紀以外には史料がないため、状況証拠の積み重ねによる推論といういさか乱暴な形で進めてみよう。本稿が覚え書にとどまるのはそのためである。

私見では壬申の乱の原因、つまり天智の後継問題とからめて考える必要があると考える。乱そのものには立ち入らない。乱の原因が天智の後継問題であったことを確認すれば足りる。結論を先に言えば、書紀の編者としては天智の後継者は大海人(天武)であって天智の子供ではなかったということ、そのことの証明の一環として建の唾と夭逝が記述されたと推測する。こう書くと、大友はどうかという疑問が生じるかも知れない。書紀によれば天智の息子は、大友と建を含めてわずか4人であり、天智紀七年二月条には、天智の家族つまり、妻と子供が紹介されているが、それによると、大友は末尾に記されていて、年齢はわからない(「懐風藻」で判明し、それによれば大友が建より年長となる)。その条の冒頭で紹介されている子供が、遠智娘の子供3人で、後の持統天皇と建が含まれる。記述の順序(母親の身分順であろう)から察するに、書紀の編者は、後継として天智の息子の中では建が筆頭で大友はふさわしくないとみなしていたのであろう。その理由は、大友の母の身分が低かったからとされている。一方、建はといえば唾でしかも8歳で死んだ。となれば、その時点で残された後継者候補は天智の息子より

も大海人こそふさわしいはずとなる。ところが、大友が成長するにつれて天智はあえて親としての情から、大海人をしりぞけて大友を後継者と考えた。そこで大海人は天智の死が近くなったとき、身の危険を感じて吉野へ脱出、天智死後の近江朝廷側の挑発に対して叛旗を翻して壬申の乱に勝利、王者になったと言うわけである。

だが、書紀の書くことをそのまま真に受けではいけないだろう。中大兄時代から政争の修羅場をくぐり抜けてきた天智が、たとえ白村江敗戦(663年)の善後策に追われていたとは言っても自分の後継者問題でつまづくものだろうか。建が唾で早死にしたにせよ、建より年長の大友がいるのであるから、母の身分はさておき大友を後継者に早めに指名しておくこともできたはずであるし、事実、大友は天智存命中に近江朝廷の太政大臣になっている。多分、建の死後天智は後継者を大海人ではなく大友と早くから決めていたに違いない。しかし、大海人の即位を正当化したい書紀の編者にとって、大友後継をはっきりと書くつもりはなかった。そこで、大友が天智死後即位したのかどうかについては明記せず(即位はしなかっただろうが近江朝廷のトップではあった)、その一方で、大海人を大皇弟、つまり、天智の弟にして次期後継者と位置付けておいて、天智嫡男の建の唾と早世を明記した、と推測する。

その記載の結果として編者の意図がどうであれ、今日、当時の皇族にも障害者がいたという事実を知ることができるわけである。

古代史においては史料が乏しく、本稿の記述も強引な推測だろう。ご批判を頂ければ幸いである。

付記

上の覚え書で建の母について疑問が出ていると書いた。これも上田正昭氏の指摘による

(「古代日本の女帝」 講談社学術文庫 1996, p.139-142。原本は講談社現代新書 1971年)。単純化すると、建の出生年は651年だが、母とされている遠智娘(造媛)の死亡年は649年とされているので、「二年前に死んだはずの人が子を生む」といったまったくつじつまが合わない話になる。」こう述べて、上田氏は、遠智娘ではない別の妃が建の生母と考えるのが合理的だろう、としている。ただし、その氏名はわからないようである。仮に別の妃だとすれば、遠智娘を母とした場合の推論は成り立たなくなる可能性がある。建の唾の原因についての推定等である。しかし、本稿の論旨に影響はないだろう。なぜなら、遠智娘でなくても、そのクラスの身分の妃、つまり大友の母よりも高い身分の母親から出生したとみなせばよいからである。